ECOCEN
BOOKLET
01

地域を元気にする地元学

現場からの報告

NPO法人 日本エコツーリズムセンター 編／福井 隆 監修

ECOCEN BOOKLET 01

地域を元気にする

NPO法人 日本エコツーリズムセンター 編／福井 隆 監修

[目次]

▼地域を元気にするために地元学を始めよう　福井 隆［東京農工大学大学院客員教授］……3
▼阿蘇カルデラツーリズムと地元学　坂元英俊［財団法人阿蘇地域振興デザインセンター 事務局長］……5
▼費用は1万円。花見時の商店街に畳200枚を敷こう！［阿蘇市精肉店・とり宮2代目インタビュー］……10
▼地元学からの出発　結城登美雄［民俗研究家］……12
▼地域に根ざす生き方　高野孝子［NPO法人エコプラス代表理事］……20
▼農山漁村の5つの課題と地元学　福井 隆［東京農工大学大学院客員教授］……26

現場からの報告

編集協力・クールインク

このブックレットは、2009年に日本エコツーリズムセンターが各地で開催したコンセプトワークでの講演等をベースに作成しました。坂本秀俊氏＝エコセンシンポジウム（熊本県阿蘇市）、精肉店・とり宮2代目インタビュー＝コンセプトワーク（熊本県阿蘇市）、結城富美雄氏・高野孝子氏＝コンセプトワーク（東北環境教育ミーティング）との合同開催。宮城県栗原市）

阿蘇カルデラツーリズムと地元学

地元学の手法で元気な人をつくることが地域の元気になる！　阿蘇地域の観光を刷新したプロデューサーが熱弁。

坂元英俊［財団法人阿蘇地域振興デザインセンター 事務局長］

わずか4年で門前町が生まれ変わる

熊本県といえば阿蘇山を中心に温泉や物産館、有名レジャー施設が豊富にあり、観光資源に恵まれた県だという印象をお持ちかもしれません。

阿蘇神社もよく知られる観光スポットであり、その門前町といえば、ある程度の賑わいが想像されることでしょう。

その門前町の商店街を2003年に撮ったものが下の写真ですが、門前町どころか商店街にも見えないという声が聞こえてきそうです。

この門前町に限らず、熊本の商店街や農村の多くは観光の恩恵をあまり受けず、斜陽化しつつありました。阿蘇には見どころがたくさんあり、年間1850万人が訪れ、200万人が宿泊するのに、なぜ地域は廃れていくのか？

これが阿蘇の観光の在り方を根本から見直す「阿蘇カルデラツーリズム」を生み出す原点となったのです。

もう一枚の緑豊かな写真は07年に撮影した同じ商店街です。わずか4年で驚くくらい雰囲気のある街に生まれ変わりました。

行政が何か特別な援助をしたわけではありません。商店街の2代目たちが危機感を共有し自分たちの手で地域づくりを行ったのです。

2003年 阿蘇市門前町商店街

2007年 阿蘇市門前町商店街

観光スポットと地域は連携がなかった

そもそも阿蘇という地域には、3つの大きな課題がありました。

地元学からの出発

地元学とは何か？　８００の村を歩き、３０００人のじいさまばあさまの声を聞いたその第一人者が語る！

結城登美雄［民俗研究家］

その土地に生きた人にまず耳を傾ける

最近、地域の将来を考える際に、「地元学」が注目されるようになってきました。

僕が地元学という言葉を20年以上前に使い始めた理由は、当時の学者さんたちが唱える「地域学」が、地域とは少し距離を置いたものだったこと。そして地元のおじいちゃんおばあちゃんたちに「おらほの地元ではなかなかそういうわけにはいかんのだ」とか、「おらほの地元ではこういうもんなんだ」と言われ続け、「おらほの地元」がいつも頭の中を占めるようになったからです。

そこに生きる人たちが、何を願い何に悩んでいるのか、そのことをまず受け止め、ベースにして、おらほの地元を考えましょうというのが地元学です。地元学は、その土地に生きた人に、まず耳を傾けることから始まります。

地域は家族の集まり

地域とは何かを考えると、エリアという空間やコミュニティという概念で捉えたり、市場経済ではマーケットと定義したりしますが、僕は、「家族の集まり」と考えています。

その理由は、近代は１４０年くらいですが、明治の初め、この国には７万１３１４の村があったといわれています。当時の人口は３３００万人。そのうちの９割、３０００万人が村に住んでいた。農業、林業、漁業。村仕事をしていたのが日本人です。村の平均的な姿は約60～70戸、人口は３７０人くらい。５万人以上の町は７つくらいしかなく、東京が約１００万人で、大阪、京都、広島、金沢、名古屋などで、そして仙台がぎりぎり５万人でした。つまり、日本の近代の始まりは、小さな村の集まりだったのです。

その小さな60～70戸の村の、60～70組の家族にとって、自分の住む村は「世界」でした。隣村を除くとそれ以外は別世界。そういうふうにして、何百年も村は村であり続けた。その力を知りたいなと私は思うようになったのです。

地域に根ざす生き方

高野孝子［NPO法人エコプラス代表理事］

世界初の無動力北極海横断など、秘境を冒険した環境教育の研究者は、郷里・南魚沼で「地域の本質」を探求中！

グローバリゼーションが「遅さ」という価値を奪う

グローバリゼーションは私たちにさまざまな恩恵を与えていますが、格差や貧困、飢餓、環境汚染などの問題を拡大させています。食べ物がなくて死んでいく人がこの瞬間にいる一方で、日本では食べ物の3割がゴミとして捨てられています。

このような負の側面が拡がっているのは、グローバリゼーションによって、人が「土地」から引き離されてしまったことも、関係があるのではないかと私は思っています。

インターネット、飛行機、新幹線……。すべてが土地に生きる生き物の速さを超えています。

例えば新潟では1年に1回しかお米ができないわけですが、植物に限らず何をするにも、何かをつくるにも時間はやっぱりかかる。この時間を無視した速さを追求することで、「遅さ」という価値をグローバリゼーションは奪ったんじゃないかと思うのです。

身体性がアイデンティティと地域をつくる

生物多様性という言葉が最近盛んに言われるようになりました。地球全体で見たときに、自然界は多様なものがあるから安定しているわけですが、生物だけでなく、人間の社会や文化も多様であるほうがきっと豊かで安定している。それをいかに平和に実現できるかというところが、人間の知恵の出しどころだと思うのです。

多様な社会を個人の側から見れば、「他の人と違う顔をした自分は一体何者なのか」というアイデンティティに行き着きます。ところが、あまりにいろんなことが速いと生きていることが希薄になり、「身体性」や「生き物としての自分」を見失います。

「自分は一体何者なのか」というアイデンティティは体と切り離せません。今の学生が「生きている感覚がない」と話すのもこれでしょう。

人間、時間、自然、いずれも身体性を伴う関わり方をすることが、自分のアイデンテ

農山漁村の5つの課題と地元学

地元学による地域再生の依頼が殺到！　全国を飛び回る実践型研究者が指摘する、全国共通の地域の課題と処方箋。

福井 隆
［東京農工大学大学院客員教授］

地域のことは地域でやれ。国の方針が大転換

国土交通省のホームページによると、国の基軸となる国土形成計画が変わることが示されています。

要点だけをまとめると①開発中心を止め、②多様な主体が参加し、③地域固有の資源を生かし、④自立的発展を目指すこととなっています。大きな変化であります。

「均衡ある発展」路線を捨て、足元の資源を生かし、地域自らが考え行動に移すことを示唆しているのです。

しかし、これまで日本の地域づくりと呼ばれるものの多くは、お金ですべての暮らしをつくることが前提となっていたのではないでしょうか。

そこでは、都会暮らしが豊かで、地方には何もないという「ないものねだり」の心をつくってしまいました。「足元の資源を生かす」と今さら言われても、お金がすべてだと思っている人たちには、「ここには金になるものは何もない」という反応を起こさせるだけでしょう。

地域の事情や個性を生かすことが地域の元気に

農山漁村の在り方を改めて見直す方法として、「地元学」は大いに力を発揮します。

地元学では、まずその土地で風土に寄り添い、長く暮らしてきた人々のお話を聞き取ることから始めます。ゆっくりていねいに、その土地の言葉で聞き取ることが何より重要で、たとえ当たり前の〝こと〟の中にも、その土地ならではの知恵や土地の事情が詰まっているからです。

昨年、宮城県の栗駒山のふもと、山田集落のおじいちゃんに聞いた言葉が忘れられません。義経をはじめ多くの著名な人々が乗った馬を育てたこの集落では、馬を育てる水のことを「山の絞り水」と呼んでいました。豊かな山が質の高い水をつくるという伝えが、言葉として今も使われていたのです。

地元学では、このような聞き取りを行い、外の目から地域の個性を把握し、その内容をできるだけ分かりやすく、写真も利用しながら絵地図な

エコセンブックレット── 01

地域を元気にする地元学──現場からの報告

2010年1月第1版発行
編者　　NPO法人日本エコツーリズムセンター
発行者　広瀬敏通
発行所　NPO法人日本エコツーリズムセンター
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-8-13
TEL:03-6457-3952 FAX:03-6457-3951
www.ecotourism-center.jp

定価（本体500円＋税）

＊このブックレットは Panasonic NPO サポート ファンドより助成を受けています。